

貞享二、三年（1685、1686年）の三河地震：  
吉田藩内とその近傍で書かれた新発掘史料による考察

中西 一郎

京都大学大学院理学研究科

**A Few Comments on the 1685 and 1686 Mikawa Earthquakes  
on the Basis of Newly Discovered Historical Documents Re-  
corded in the Toyohashi Region, Central Japan**

Ichiro NAKANISHI

Department of Geophysics, Kyoto University  
Kyoto 606-8502, Japan

**Abstract**

It is mentioned in several earthquake catalogues of historical earthquakes that two earthquakes occurred in May, 1685 and on October 3, 1686 in the Toyohashi region, central Japan. We have recently found historical documents recording the latter earthquake in the Toyohashi region where previous studies located the epicenter of the 1686 earthquake without documents. Our analysis of the documents suggests that the 1685 earthquake did not occur. The damage recorded in the historical documents on the 1686 earthquake was large in villages on the Pacific side of the Toyohashi region. According to this evidence we consider that the epicenter of the 1686 earthquake may be located near the Pacific coast to the south of the town of Toyohashi. This large earthquake, the magnitude of which is estimated to be about 7, occurred 21 years before the great Hoei earthquake of October 28, 1707 ( $M=8.4$ ). In the eastern part of Aichi prefecture, including the Toyohashi region and the offshore region of the Atsumi peninsula, moderate earthquakes have recently occurred. It is possible that the 1686 earthquake was a seismic precursor to the great 1707 earthquake. The eastern part of Aichi prefecture and the offshore region of the Atsumi peninsula in Aichi prefecture may be regions where we should carefully observe seismic activity, and other geophysical and geochemical phenomena.

**Key words:** historical earthquakes, Nankai trough, great Hoei earthquake  
seismic precursors, Mikawa earthquakes

**はじめに**

『理科年表』（1997）あるいは宇佐美（1996）によれば、貞享二年三月（1685年）、貞享三年八月十六日（1686年10月3日）に現在の愛知県東三河地方または遠州灘に震央を持つ

地震研究所彙報特集号：研究集会「フィリピン海プレート：その構造とテクトニクス・火山活動との関係」

Table 1. The 1685 and 1686 Mikawa earthquakes presented in standard chronological tables of Japanese historical earthquakes.

理科年表 (国立天文台, 1997)
1. 貞享二年三月 (1685年) M6.5 三河: 渥美郡で山崩れ, 家屋倒壊し, 人畜の死が多かった. 2. 貞享三年八月十六日 (1686年10月3日) 34.7° N, 137.4° E, M6.5~7 遠江・三河: 遠江で新居の関所など少々被害, 死者があった. 三河で田原城の矢倉など破損, 死者があった.
新編日本被害地震総覧 (宇佐美, 1996)
1. 貞享二年三月 M6.5 理科年表と同じ被害の記述. 2. 貞享三年八月十六日 34.7° N, 137.6° E, M7.0±0.25 理科年表の記述以外では, 遠州横須賀城の石垣14ヶ所で崩れはらみ出す. 伊勢・京都・奈良・和歌山・名古屋・江戸有感. 名古屋で余震8回.
愛知県災害誌 (名古屋地方気象台, 1971)
1. 貞享二年三月 M6.4 理科年表と同じ被害の記述. 2. 貞享三年八月十六日 34.6° N, 137.4° E, M7.0 理科年表とほぼ同じ被害の記述.

地震が発生した, とされている (Table 1). この2地震は宝永四年十月四日 (1707年10月28日) の東海道・南海道地震 ( $M=8.4$ ) にそれぞれ22年, 21年先駆して発生し, 宝永地震に対する広義の前震であった可能性がある.

したがって宝永地震の震源域内または隣接域で発生したとされる貞享二, 三年の三河地震を詳しく調査することにより, 東海道沖で発生する巨大地震に先駆する地震活動に関する知見を得られる可能性がある. しかし, この2つの三河地震には, 歴史地震の取り扱いという点から問題点がある. 貞享二年の地震に関しては, その発生の証拠となる1次史料がこれまで確かめられておらず, ある郷土史の一記載が根拠になっており, その地震の実在性には検討の余地がある. 貞享三年の地震に関しては, その震源域と考えられている吉田藩領とその隣接域 (現在の愛知県豊橋市) で書かれた史料がこれまで発見されておらず, 地震の発生自体には疑いがないものの, その震源域と規模に関して不明な点がある.

本論文ではこの貞享の三河地震に関して新たに発掘された史料に基づき, 貞享二, 三年の地震の存在とその震央位置について議論する.

#### 既知史料と貞享の三河地震に関する研究

Table 1には, 3件の地震年表に載せられた貞享三河地震の記事を示した. これらの記

吉田藩内とその近傍で書かれた新発掘史料による考察

載は、『増訂大日本地震史料』（文部省震災予防評議会，1941），『新収日本地震史料』（東京大学地震研究所，1982，1989，1993），都司（1979，1980，1981）に紹介された原文献史料に基づいている。

これまでに知られているこれらの地震に関する史料の中で震央近くについて書かれたものを Table 2 の番号 3～6 と番号 8 に示す。また関連する地名を Fig. 1 に示す。番号 3 の『甘露叢』，番号 4 の『田原藩日記』については都司・上田（1993）に史料としての検討がされている。番号 5 の『常光寺年代記』の原本は昭和 20 年 8 月 1 日の戦災で焼失した。常光寺は渥美半島先端部の愛知県渥美郡渥美町堀切の城山の麓にある寺院（Fig. 1）で，霊松山常光寺という。本研究では『渥美郡史』（渥美郡役所，1922）編纂用として作成された新写本を用いた。しかし，この写本がどこまで正確であるかは不明であり，記載内容の採用にはそれなりの注意が必要であろう。この常光寺および年代記，そして新写本については

Table 2. Historical documents written near the source regions of the 1685 and 1686 Mikawa earthquakes.

番号	記録名	貞享二年三月	貞享三年八月十六日
1	永江喜左衛門日記	記述なし。	吉田にて大地震。
2	高塚村免定書付	記述なし。	八月五日 5 つ半ニ 大ぢしん仕，谷かけ 大ち（地）もわれ申 候。
3	甘露叢	記述なし。	新居で関所・民家破 損。田原城の櫓・民 家倒壊。
4	田原藩日記	記述なし。	田原城・民家破損。 赤羽根で兄弟 3 人 生き埋め。
5	常光寺年代記	記述なし。	記述なし。
6	西尾家譜一	記述なし。	「遠州横須賀城破損 之覚」：本丸・二の 丸等の石垣の一部が はらみだし，崩壊。 三の丸の櫓が傾き破 損。
7	朝倉仁右衛門翁傳（ 朝倉家所蔵細谷村記 録抜粋）	記述なし。	三月 大地震。
8	渥美郡史（細谷村記 録・常光寺年代記）	大地震山々谷々欠失 家屋倒壊人畜多く死 す	記述なし。

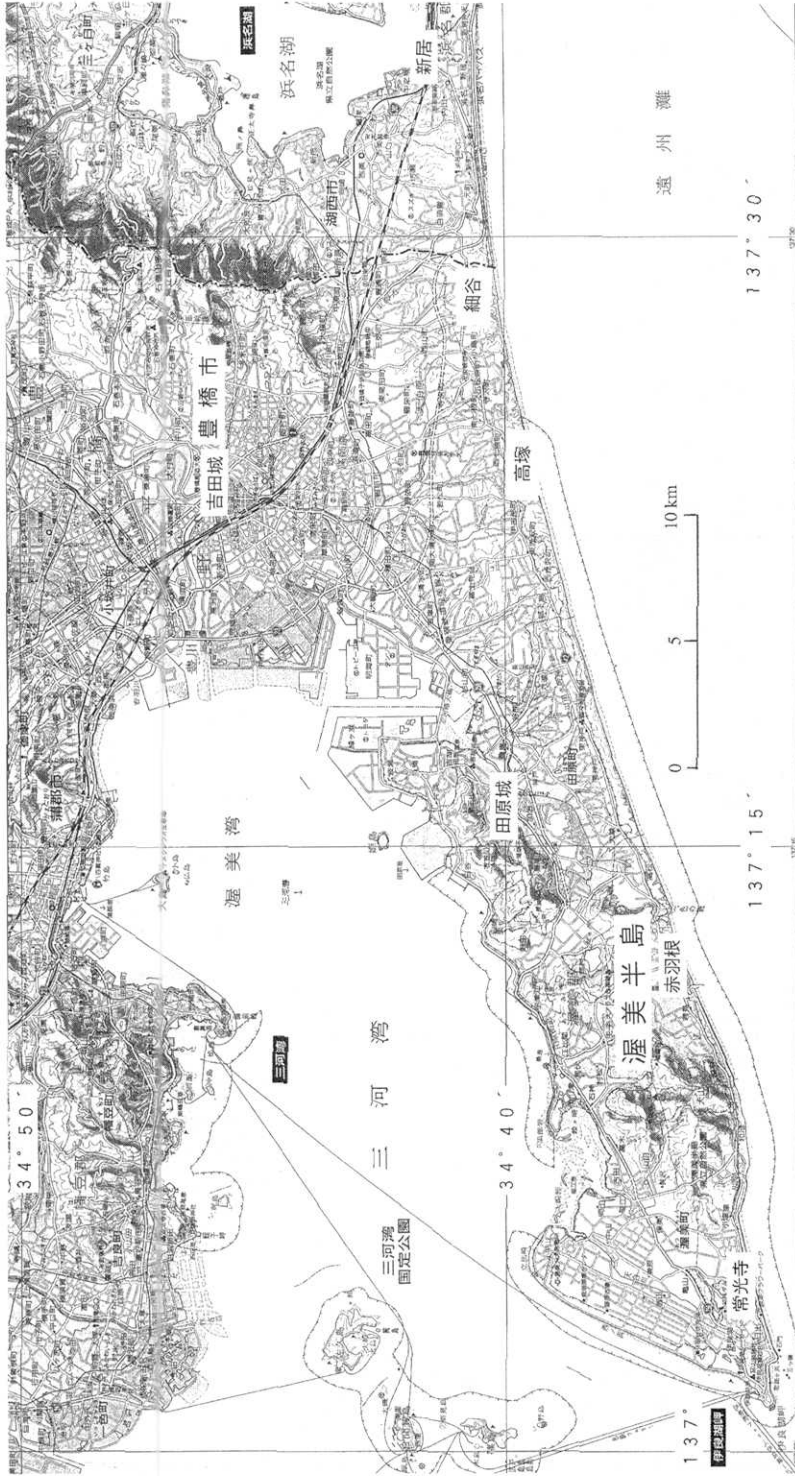


Fig. 1. Map of the Atsumi peninsula and surrounding region. The map is based on Prefecture Map No. 23 (Aichi Prefecture) (Shobun-sha, 1977). 「地図使用承認©昭文社第99 W0 27号」.

萩原(1995)の184-185頁に山本武夫氏による解説がある。番号6の『西尾家譜一』は『静岡県史』別編2(1996)によるもので遠江国横須賀城主西尾家の政務記録である。番号8の『渥美郡史』では『細谷村記録』・『常光寺年代記』を引用して歴史地震を含む自然災害を年代順に記述している。しかし、『細谷村記録』はその所在がこれまで不明であって、『渥美郡史』中の歴史地震の記載のどの部分が『細谷村記録』に基づくものであるかも明らかではなかった。

これまでこの貞享の三河地震に言及した研究として、宇佐美(1996)以外に、今村(1943)と都司・上田(1993)がある。特に都司・上田は遠州横須賀城の被害を詳細に調べ、貞享三年の地震の震源域と地震規模を推定している。

### 新史料

本論文では、これまで地震研究者には知られていなかったが、歴史地震の研究に新たに加えることが出来ると考えられる史料を新史料と呼ぶことにする。国史で用いられる新史料とは意味する内容は異なる。今後歴史地震の研究に於いて混乱を避けるためには新たな用語を定義する必要がある。宇佐美氏は「新地震史料」を提案されている(私信, 1999)。

貞享三年の三河地震に関して、現在の豊橋市域内(吉田藩とその近傍)で書かれた史料はこれまで発見されていない。その理由として、この地域の領主が、江戸幕府の政策により、しばしば替えられていたことが考えられる。吉田藩の場合、江戸開府から幕末までの約270年間で、藩主が9家22代にもおよんでいる。貞享の頃の藩主は小笠原家であり、この小笠原家は幕末時には唐津(佐賀県唐津市)に移藩していた。また吉田藩領に隣接する太平洋側の地域、例えば上細谷村は古くから伊勢神宮領であったが、その後天領になり、貞享の頃は志摩国鳥羽城主土井周防守利益の領地であった。その後明治元年(1868年)までに4度領主が替わっている。享保十一年(1726年)から明治元年までは天領であった(那賀山, 1936)。

他の理由として、これまで、歴史地震の史料収集が精力的に行われた結果、『新収日本地震史料』に収録されている地震史料の量はすでにかなりの量になっているが、未収録の地震史料はまだまだ膨大であることが指摘できる。今後、例えば地方(じかた)史料については、各地域の歴史研究者と地震研究者との共同研究が必要であると考えられる。

『永江喜左衛門日記』(佐賀県唐津市永江雅雄氏蔵)(豊橋市史編集委員会, 1976)は江戸時代初期の吉田藩主を務めた小笠原家の家臣であった永江喜左衛門景任と紋左衛門景明父子の日記であるが、「(貞享三年)寅八月十六日吉田ニて大地震」という記述がある(Table 2, 番号1)。

貢租関係の史料に分類される『高塚村免定書付』(田中八兵衛, 寛文十一年~元文三年)には「貞享三寅ノ年(中略)八月五日五つ半ニ大ぢしん仕、谷かけ大ち(地)もわれ申候」と書かれている(豊橋市史編集委員会, 1978)(Table 2, 番号2)。高塚村は現在豊橋市高塚町で太平洋に面し細谷の約6km西方にある(Fig. 1)。また、この史料中には、「貞享四卯ノ年高塚村中山屋敷へあかり申候、四月十五日八兵衛浜より山屋敷へ上り申候、家ふしん申候、六月五日取りかかり、七月出来申候」と、この地震の後貞享四年に高塚村中が浜屋敷から山屋敷へ引越したことが書かれている。渥美半島の太平洋岸に位置する高塚村の地盤が、貞享三年の地震によって不安定になり浜屋敷の崩落が起こったか、崩落の危険

性が出て来たことによるのかもしれない。

『朝倉仁右衛門翁傳』（那賀山，1936）には、『細谷村記録』の一部と考えられる史料が『朝倉家所蔵細谷村記録抜粋』として書かれている（Table 2，番号7）。細谷村は現在豊橋市細谷町・東細谷町で太平洋に面し，東は静岡県境に接している（Fig. 1）。この朝倉家は越前金ヶ崎（現在の福井県）城主朝倉景冬の一族とされ，天正元年（1573年）織田信長のために一乗谷城（城主朝倉義景）が落とされた後，諸国を流浪の末，細谷から七根（現在の豊橋市細谷町，同市西七根町・東七根町）に移り住んだとされている（高豊史編纂委員会，1982）。この地は足利末期より野々山氏が勢力を有していたが，徳川初期（おそらく寛文の頃）細谷の朝倉が野々山氏に代わり郷土となり（那賀山，1936），以後この細谷朝倉家は細谷以西近隣八ヶ村の大庄屋となった（高豊史編纂委員会，1982）。『朝倉仁右衛門翁傳』には，貞享三年の地震については，短く「貞享三年三月大地震」と書かれている。『渥美郡史』（1922）にあるような具体的な被害の様子（Table 2，番号8）は書かれていない。

『高塚村免定書付』では地震の発生は八月五日に，『朝倉仁右衛門翁傳』では三月に地震が発生したと書かれている。両者とも八月十六日の地震の記録と見なした場合，この地震発生日の違いに疑問が残る。特に後者の場合違いが大きい。本論文では両者とも八月十六日の地震と見なして議論を進める。

#### 貞享二年三月に三河地震は発生したか？

Table 2 が示すように，貞享二年の地震被害を記述しているのは『渥美郡史』のみである。『渥美郡史』は『細谷村記録』と『常光寺年代記』を引用しているが，『常光寺年代記』（新写本）にはこの地震の記述はない。従って，『渥美郡史』の「大地震（中略）人畜多く死す」という記述は『細谷村記録』に基づくことになる。『渥美郡史』の貞享二年のところは，「貞享二年 五月上旬より六月下旬迄（後略）」という記載があり，その次の行に「全年三月大地震（後略）」と書かれている。「全三年 三月大地震（後略）」とするところを「全年 三月大地震（後略）」と「三」を書き落とした単純な印刷時の手違いと考えられる。

貞享三年八月の地震は震央近くだけでなく，名古屋（『鸚鵡籠中記』），伊勢（『外宮子良館日記』），京都（『東宮日次記』），江戸（『江戸幕府日記』）等の広い範囲で有感であった（Table 1（宇佐美，1996）；東京大学地震研究所，1982・1989）。もし『渥美郡史』に書かれているような貞享二年三月の地震が本当に発生していれば，貞享三年の地震と同様に広い範囲が有感になるはずである。しかし，宇佐美氏が中心となり20年に亘って収集した史料（東京大学地震研究所，1982・1989・1993；宇佐美，1998）の中に貞享三年八月の地震について書かれたものはあるが，貞享二年三月のものはひとつもない。この事実も貞享二年の地震が発生しなかったことを支持する。

『増訂大日本地震史料』（文部省震災予防評議会，1941）によって引用され，その後もTable 1のような『理科年表』（1997）をはじめとする標準的な歴史地震年表および最新の防災関係資料（例えば，『愛知県活断層アトラス』（愛知県防災会議地震部会，1997））に記載され，テクトニクスの議論（金折・他，1991）にも用いられてきた貞享二年の三河地震は，有被害歴史地震の諸表から削除されるべきであろう。

### 貞享三年八月十六日の三河地震

『高塚村免定書付』(Table 2, 番号 2), 『渥美郡史』(Table 2, 番号 8) の記載を貞享三年八月の三河地震による高塚村, 細谷村での被害についての記録と見なすと, 震源域近傍の地震史料として新たに吉田, 高塚村, 上細谷村, 細谷村の 4ヶ所の記録が加わったことになる。ここでは『朝倉仁右衛門翁傳』で上細谷村について書かれていることを考慮し, 上細谷村と細谷村を区別した。細谷村は上細谷村と下細谷村に分かれていて, 明治以後も異なる文化的環境下にあり, 現在も細谷町と東細谷町に分かれている。

この中で史料が具体的に示す被害は高塚村と細谷村で大きい。Table 2にあるように, 高塚村では「大ぢしん仕, 谷かけ大ぢ(地)もわれ」と書かれ, 細谷村については「山々谷々欠失家屋倒壊人畜多く死す」と書かれている。吉田と上細谷村については「大地震」と書かれているだけであり, 被害については記載がない。被害が大きい所ほど震源域に近いと仮定すると, 高塚村と細谷村が 4ヶ所の中で最も震源域に近いと考えられる。高塚村の記録には死傷者の記載はないが, 地割れが生じたことを考慮すると, 当地での震度は VI 程度であったと推定出来る。細谷村での震度も VI と推定する。都司・上田(1993)は赤羽根, 田原, 細谷での震度を VI と推定している。従って, 地震は赤羽根, 田原, 高塚, 細谷の周辺領域またはその領域の沖合いで発生したと推定出来る。

### 議論

#### マグニチュード M.

貞享三年の三河地震に対して, 都司・上田(1993)は  $M=7.2$ , 宇佐美(1996)は  $M=7.0 \pm 0.25$  と推定している。マグニチュードはその定義によっても値が異なってくる。また計器観測が行われている現在でも, 決定方法によって 0.3 程度の違いが出てくることもある。さらに, 同じ様な被害であっても仮定する震源の深さによってもマグニチュードは異なった値をとる。歴史地震の場合この問題はより深刻である。

貞享三年の地震はフィリピン海プレートの沈み込みによるプレート境界地震であった可能性もある(都司・上田, 1993)。広島県西部沖の瀬戸内海に震央を持つ 1905 年(明治 38 年)の芸予地震(死者 11 名,  $M7.2$ ), 奈良県中部で発生した 1952 年(昭和 27 年)の吉野地震(死者 9 名,  $M6.8$ )は死傷者を伴う被害を起こした。この 2 地震はフィリピン海プレートとユーラシアプレート間で発生したプレート境界地震であり, 震源の深さは 40~50 km と推定されている。渥美半島周辺でも, 地震の規模は大きくないが, フィリピン海プレートの沈み込みによると考えられるプレート境界地震が発生している。

#### 吉田での被害と震度.

『永江喜左衛門日記』には「吉田ニて大地震」としか書れておらず, 具体的な被害は不明である。しかし, 単に「大地震」ではなく, 「吉田ニて」と具体的に地名を記している点に注目すべきである。日記の筆者に吉田直下で大地震が発生したと思わせるような被害が発生したのであろう。ただし, 八月十六日の記載は筆者が江戸滞在中に書かれた可能性が高く, そのため具体的な被害が書かれていないことも考えられる。現在の豊橋市には貞享年間の藩関係の史料は皆無である。『豊橋市史』(豊橋市史編集委員会, 1976, 1978)に収録されているこの時期の史料の原本は, 佐賀県唐津市に所蔵されている。従って, 貞享三年

の地震の詳細を調査するには唐津市に所蔵されている小笠原家とその家臣関係の史料を調査する必要がある。これらの史料の調査結果については別の機会に報告する。

#### 『細谷村記録』

『朝倉仁右衛門翁傳』にある『朝倉家所蔵細谷村記録』の原本は昭和20年(1945年)のアメリカ軍による豊橋空襲で灰燼に帰した(朝倉久, 私信)。『渥美郡史』の中での年号の間違いを考慮しても『細谷村記録』について問題が残る。1つは同じ『細谷村記録』を引用している2つの文献(Table 2の番号7と8)で地震についての記載内容が異なっている点である。その原因として、那賀山(1936)が被害の記載を省略した、『渥美郡史』にある被害は下細谷村で発生した、複数の『細谷村記録』が存在した、ことが考えられる。

#### 広義の前震

貞享三年(1686)の三河地震の21年後に宝永四年(1707年)の東海道・南海道地震が発生している。南海トラフ沿いの巨大地震に先駆して内陸部の地震活動が統計的に約4倍まるることが宇津(1974)によって指摘されている。また都司・上田(1993)も貞享三年の地震が宝永四年の地震の先駆的な地震であった可能性を指摘している。すでに述べたように最近渥美半島周辺でM6前後のプレート間地震が約10年に一度の割合で発生している。貞享三年の地震のような中規模被害地震が東海沖巨大地震に先駆して発生する可能性も考慮してこの地域の地球物理学的・地球化学的観測を行う必要がある。

#### 結 論

標準的地震年表および最新の地震防災関係資料に記載されている貞享二年(1685年)の三河地震は、その根拠となった『渥美郡史』の印刷時の単純な手違いによるものであり、実際には発生していないと考えられる。貞享三年の三河地震は愛知県渥美郡赤羽根町、同田原町、愛知県豊橋市高塚町、同細谷町・東細谷町の周辺領域またはその領域の沖合いで発生したと推定出来る。渥美半島とその周辺で中規模地震が東海沖巨大地震に先駆して発生することも考慮して観測を行うべきである。

#### 謝 辞

中西守氏、中村信比古氏、彦坂宗丘氏から文献をお借りしました。鈴木源一郎氏、後藤清司氏、増山真一郎氏から史料をお送り頂きました。上田和枝氏から『常光寺年代記』(新写本、謄写版刷)のコピーをお送り頂きました。杉浦頼治氏から『朝倉仁右衛門翁傳』の所在をお教え頂きました。都司嘉宣氏から論文のコピーをお送り頂きました。山科健一郎氏、宇佐美龍夫氏、都司嘉宣氏から本論文に関するコメントを頂きました。記して感謝いたします。なお本稿は、平成9年度東京大学地震研究所共同利用・研究集会(課題番号:1997-W2-09)「フィリピン海プレート:その構造とテクトニクス・火山活動との関係」における議論に啓発されてまとめた。

#### 文 献

- 愛知県渥美郡役所, 1922, 「渥美郡史」, 736頁。  
愛知県防災会議地震部会, 1997, 「愛知県活断層アトラス」, 83頁。  
萩原尊禮(編著), 1995, 「古地震探求—海洋地震へのアプローチ」, 東京大学出版, 306頁。



吉田藩内とその近傍で書かれた新発掘史料による考察

- 今村明恒, 1943, 駿遠三地震考, 地震, 第1輯, 15, 203-207.  
金折裕司・川上伸一・矢入憲二, 1991, 中部日本内陸に起きた被害地震 ( $M \geq 6.4$ ) の時空分布に認められる規則性—活動周期と発生場所—, 活断層研究, 9, 26-40.  
国立天文台, 1997, 「理科年表」, 平成10年1998年版, 丸善書店, 1054頁.  
文部省震災予防評議会, 1941, 「増訂大日本地震史料」, 第1巻, 943頁.  
名古屋地方気象台, 1971, 「愛知県災害誌」, 464頁.  
那賀山乙巳文, 1936, 「朝倉仁右衛門翁傳」, 東三文化研究会, 97頁.  
静岡県教育委員会, 1996, 「静岡県史」, 別編2 (自然災害誌), 808頁.  
高豊史編纂委員会, 1982, 「高豊史」, 1394頁.  
東京大学地震研究所, 1982, 「新収日本地震史料」, 第2巻, 575頁.  
東京大学地震研究所, 1989, 「新収日本地震史料」, 補遺, 1222頁.  
東京大学地震研究所, 1993, 「新収日本地震史料」, 続補遺, 1043頁.  
豊橋市史編集委員会, 1976, 「豊橋市史」, 第6巻 (藩史料), 1146頁.  
豊橋市史編集委員会, 1978, 「豊橋市史」, 第7巻 (地方史料), 1139頁.  
都司嘉宣, 1979, 東海地方地震津波史料 (I), 防災科学技術研究資料, 35, 436頁.  
都司嘉宣, 1980, 地震・津波補遺史料, 防災科学技術研究資料, 55, 41頁.  
都司嘉宣, 1981, 紀伊半島地震津波史料, 防災科学技術研究資料, 60, 392頁.  
都司嘉宣・上田和枝, 1993, 貞享3年8月6日 (1686年10月3日) の遠江三河地震による遠州横須賀城の被害, 歴史地震, 9, 43-61.  
宇佐美龍夫, 1996, 「新編日本被害地震総覧 [増補改訂版]」, 東京大学出版会, 493頁.  
宇佐美龍夫, 1998, 「日本の歴史地震史料」, 拾遺, 日本電気協会, 512頁.  
宇津徳治, 1974, 南海トラフ沿いの大地震と西日本の破壊的地震の関係, 地震予知連絡会会報, 12, 120-122.

(Received August 31, 1998)

(Accepted February 21, 2000)

付録. 朝倉家所蔵細谷村記録抜粋に書かれた地変

『朝倉仁右衛門翁傳』(那賀山, 1936)にある『朝倉家所蔵細谷村記録抜粋』の中で地震・津波・火山関連の記事を下記に転載する。『朝倉家所蔵細谷村記録抜粋』の記載は延宝三年から始まり正徳十五年で終わっている。地震・津波・火山以外に, 大飢饉, 大風, 大雨, 落雷, 疫病の流行, 大風大雨に起因する太平洋岸の台地の崩落, そして四年間を掛けた浜屋敷 (上細谷の海岸に位置し, 朝倉家の元屋敷を含む) から中屋敷 (現在の地であり, 朝倉家の屋敷はその中央の字中嶋に位置した) への上細谷村全体の約15町 (1.6km) の移転等が書かれている。

静岡県浜名郡新居町の白須賀の地名に残っているように, 渥美半島の太平洋沿岸の台地 (現地では山と呼ばれている) の一部は粘着力の弱い白砂を多く含む堆積層から出来ており, 上細谷村だけでなく, 高豊地区 (城下, 赤澤, 伊古部, 高塚, 西七根, 東七根) および五並地区 (寺澤, 小松原, 小島, 上細谷, 下細谷) では大雨, 高潮, 地震, 津波による太平洋岸の浸食, 台地 (山) の崩落に起因する神社仏閣を含む村全体の浜屋敷から山屋敷への引っ越しを経験している。特に宝永地震 (1707年) に起因する引っ越しが顕著である。

富士山の宝永噴火についての記述がある。快晴時にはこれらの地区から富士山を遠望することが出来る。

貞享三年三月大地震

元禄十六年（略）同年十一月廿二日（略）同夜八ツ時江戸大地震津浪。

宝永四亥年十月四日，九ツ過時分大地震，午未ノ方大分鳴リ，八ツ時津浪ニテ村々網船漁道具残ラズ流失，谷ハ山に埋まり，山ハ崩レテ谷ニナリ，人馬共死ス。赤澤両伊古部ニ三四ヶ所五七町四方ノ海中濱中ニ嶋山出来申候。（改行なし）

十月十一月十二月迄日ニ五度十度ツゞ震フ，翌年正月閏月子ノ年中，月に一二度ツゞ動キ，人々野山畑中ニかりや，志ぶかみ其外はり渡世スルコトニヶ月ナリ。

同十一月廿三日四ツ時ヨリ終日丑寅ノ方大分ナリ申候ニ付き，船網共残ラズ山ノ上へ運ビ申候，八ツ時ヨリ少しツゞ間アリ夜ニ入り丑寅ノ方ニ高サ二三十丈廻リ二三十丈ノ火ノ山見エ人々驚キ申ス所ニ，十二月八日ノ夜雨降り火キユル，此日迄ハ毎夜焼ケ申候。後ニ承リ候ヘバ富士山ノ東ノ方一里四方ノ穴焼出来原吉原ハカマヒナシ，三島ヨリ小田原戸塚其邊ノ在ニハ丈二丈ツゞ焼ホコリニテウマリ申ス由米大分高直。